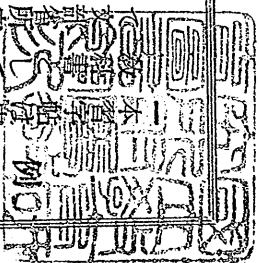


K220.72

64

3



本習字帖は中學校及び同程度の諸學校の習字
 教科書所定の現行教授要目に準據し、一部
 三卷にて成り、毎學年にその一卷を課するも
 のとす。

一本習字帖の特色は、手本と同大なる文字を習
 はしむるを目的とせるにあり。従來の習字帖
 は、一般に手本よりも大いなる字を習はしむ
 る様式に成れるが故に、臨書の際に十分に手
 本を寫すこと能はず。本習字帖の編者は多年
 の經驗によりて、この不便を除くにあらざる
 は普通教育に於ける習字の上達竟に望むべか
 らざるを信じ、製本及び體裁上の問題を第二
 に措き、専ら教授上に實際の効果を收めんと
 を期して、こゝに本習字帖を公にせり。

言

一本習字帖は材料を選ぶに實用を旨とし、専ら
 日常必須の語句、溫雅健全なる文章を採録し、
 而してその間に書體と點畫との上に變化を求
 めて、間架結構を授くるに遺漏なきを期せり。
 通信往復の書簡文はその簡詳長短によりて次
 第し、配置の季節を參酌し、諸般の例に互り
 て措辭作意の模範たるべきものを擧げ、別に
 附録として色紙短冊の書例を載せたり。
 一本習字帖の大字小字細字の分量及び捺排は、
 練習上の功程を參酌して配置上に變化あらし
 めたるものなれど、授業上の便宜によりて前
 後すること固より妨なし。

大正二年七月

開成館編輯所 識

手紙の文は極力平かな

易しく丁寧な言葉を用いて

その目にも分かるように

書くことは最も大切なこと

である。その時、その時、

その時、その時、その時、

持復返子所使拜免

仰如之也示志也知

春暖去采斲汤的好时节

晚春杨柳依依牡丹踟蹰

市为亲样皆之也一回也拈

私为慈子德存之在爱子

能於大受恩賜
而於名也壯也
將有之也公也
也起居如象一

謹啓来る廿八日は由存の
海軍記念日にて當日は
國民爲武の象徴を振
興し保せて海事思想を
涵養せんとして結ぶ所より
日本海に戦ふ参加せし

装甲巡洋艦出雲を岩港
沖合小回航せしめ艦内
経覽を許さるる筈よし由望
被小好寺をりにはしは私共
由供もしあぐへく弟由連礼
由親覽いふに由望い加

當日午前中に由城一の程

具一備せて海軍思想を
涵養せんとして結ぶ所より
日本海に戦ふ参加せし
装甲巡洋艦出立を岩港
沖合に回航せしめ艦内
縦覧を許さるる善よし望み
誠小好きなりにはは私共
由供出しあぐへく弟由連れ
由親隨いふに由望みか
當日午前中に由城一の程
由待ちしし上げの致具

五月廿四日

太郎様

御父上様

膝下

大正 年五月六日
堺市大濱通一丁目
住吉橋方
菅原太郎

大阪府南河内郡道明寺村
大字道明寺
菅原道之助殿

梅雨等陶——初及踏暑
土用中元昔蒲蓮船報月立
遮暑納涼極妙散步運動
分莊投宿帶立海完出發
病業靜善心配出大爭仁
吾體輕快金龜新行

兄送出迎親團視察孩
歸家土產取調福糧告書
殿樣君閣下親展布直披
先生坐右批下傳史執筆
貴殿為老兄定方也主人
自份私爭尔弟讨方也弟共

春の巻は「一」に始りて神杵ノ舞は

山ノ舞もあはせしむる草木毎に之はて

女を踊りては家には春に美なる舞あり

夜山のけしき妻子女のたのむ高き塔大空に

月をかりて空に舞にたひあはるる能くまて

見らば珠玉すべからば心なほけしき眺あり

其の後は由々音のたけ
在りの日と海を語ると
益々由々健の由々と整
りしにけ方は山中とて
朝夕の散歩の介は読書よ
耽り在りの山中と海を
よの生活と互よ感無いらに
愛なるか日記交換済りも
面白くもく存りの由々成
の上は来る日曜日より一週
間実けりたけたぐ存りの
先は由々い奇あり入りの

朝夕の散歩の介は讀去よ
耽りたりい山中と海客
よの生活亦互よ感無いらに
愛なるか日記交換済りも
面白くあるべく存りい由成
の上は来る日曜日より一週
間実けりたりたぐ存りい
先は由何い書あり入れい
致を

三月三日

山村栄次郎

清々 徳 殿

八月三日
 長野縣諏訪郡上諏訪町
 高田方
 山村崇次郎

靜岡縣濱名郡舞坂町
 今川殿方
 清水 惣殿
 親展

張吳秋冷如夕肌涼一
秋魂為月十五夜出之聲
再校勉強燃火親一打一
付海競技學友會高相舍
活激熱心着手研究計畫
會之設置右後役事務所

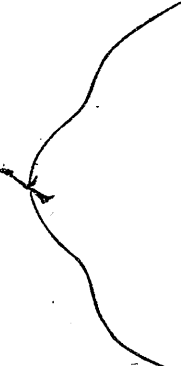
奔走周旋盡力世法幹事
準備整頓教規一獲家基
然禮佛中孰是究竟應待
辱人有難辱之由更付
先此取教一才太中一
前是禮言始首存相不一

有後市中町の素先生
弄術書早速版元一合
をせの介一は品切のす
申し在りの一日も早く
由精勵たされたる品の
やうに取知渡し一巻持く
るねあをせ僅に一冊古本
まはしつとも男の求め只
今書留小包郵便にて
由送り申しは曾由落掌
申されたるは先は由返
りかたが 敬首

由精勵をされたる事思召の
やうに承知候し一紙書付く
為ぬあるに僅に一冊古本
よりはとゞも男に求め只
今書留小包郵便にて
由送り申し以曾由落掌
下されたるに先は由返
事知れしに候旨

十月廿一日 大野義三助

橋 逸雄 殿
貴砂



 大坂市東區淡路町四十目
 四十九番屋敷
 大野義之助
 十月廿一日

高知縣土佐郡江日村
 大川橋
 逸雄殿
 貴砌

晚秋初冬夜言家客已未
菊时句寄袁红紫福川初雪
天书岁年款兵武演智召集
徽兵检查遍然控豫合格
丁定休队位階勳号功级
官峻敏任授晋光崇荣面目

霰

美士の如く此の如く

如く此の如く

如く此の如く

如く此の如く

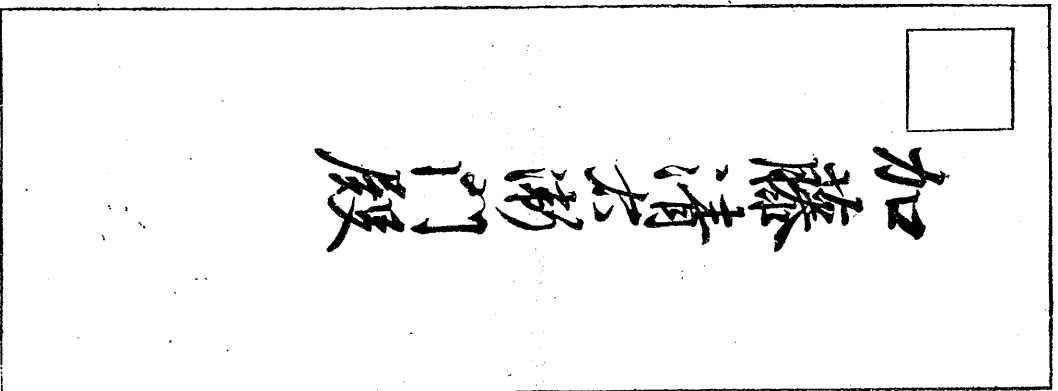
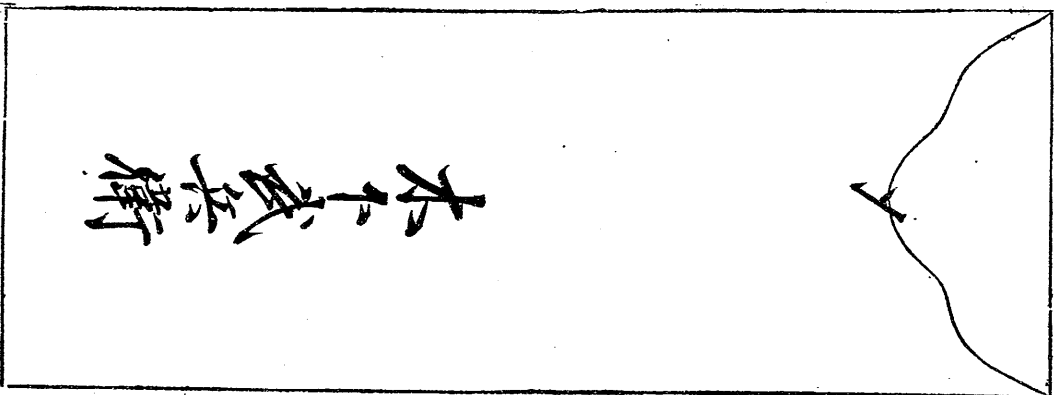
霰

發乎中而為之於外

而為之於外而為之於中

發乎中而為之於外

而為之於外而為之於中



謹啓 健太郎殿 幸す

このたびは 珠遊にお成さる

徳出由更 領由様 嬉しく

由海をたふされいおむす

而一身由一つの由名譽

のみより一紙の光栄けの

事には由中の私事 當時

極中申すて由出迎も

いたさず共冠したるいぬ

由徳も上げの鮮魚一籠

御りの由祝の印までよ送

上致し以由由納やされた

のみわりの一紙の光栄けの
事には申上の私事、当時
極好の中へ来て由出迎も
いたまふ、夫程のたゞの由
由程も上げの鮮魚一籠
聊の由祝の印までよ逢
上致し、いふは納められた
その内系上由悦もしよぐ
づくの先は取致へずお
まめで敬具

十二月一日

木下武兵衛

加藤清お漸つ殿

朕惟之、我力皇祖皇宗國ヲ肇ルコト宏遠ニ
徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ、我力臣民克ク忠ニ
克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥美ヲ濟
セル、此レ我力國體、精華ニシテ教育、淵
源亦實ニ此ニ存ル、爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ
友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能
ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世
務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦

緩急中レハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮、
皇運ヲ扶翼スハ是、如キハ獨朕力忠良、
臣民タルニナラス又以テ爾祖先、遺風ヲ顯
彰スルニ足ラシ

斯、道、實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシ
子孫臣民、俱ニ遵守スハ予所シ之ヲ古今ニ通
シテ諷ラス之ヲ中外ニ施シテ恃ラズ朕爾臣民
ト俱ニ拳拳服膺シテ感其德ヲニセコトトク
庶幾ク

市地をめぐりての由紙手
如何と由業に在りは
ひよ先生始の皆と極
由機嫌よく由答へる
されにおもむき由同業よ
由堂の叔新の学年
試験も由紙の通りの
来續てて由く第四学
年よ逢みゆい香由あん
なへ下されたるのなほ
けよなむら由一く由措
導よ新りたぐ新ひあけい

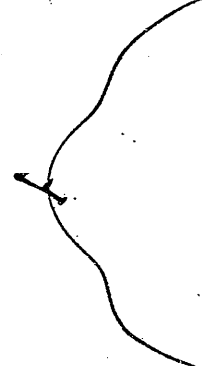
由望の叔父の学年
試験も父紙の通りの
成績をとり、第四学
年へ進み、いよいよ
お下された方へは
け上なごらうと、由
導の形も、お父の
先は、お父様より、
お父様より、お父
様より、お父様より、

三月廿八日

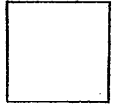
松平良一郎

伊藤忠義殿

4-14



 三月廿八日
 松平良一郎
 三丁目二番地
 關東州大連乃木町



 朝鮮京城本町
 伊藤忠義殿
 由直披

第一行

第二行

第三行

第四行

第五行

1

110007

大正二年
大正二年

● 著作權所有 ●

【中】

三

編纂者 開成館編輯所
著者 岡田起作
發行者 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
西野虎吉

印刷日 一月廿日
發行日 一月廿四日

【價定納字習】

錢 五 拾 金

● 複製嚴禁 ●

目録者 開成館
發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地
大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角
西都販賣所 三木佐助
東京市日本橋區數寄屋町九番地
東都販賣所 林平次郎

〔振替口座〕東京第五支店 貳番